



TITLE:

或る女性の影：周作人の文學的出發

AUTHOR(S):

森, 雅子

---

CITATION:

森, 雅子. 或る女性の影：周作人の文學的出發. 中國文學報 2005, 69: 79-118

ISSUE DATE:

2005-04

URL:

<https://doi.org/10.14989/177955>

RIGHT:

## 或る女性の影

——周作人の文學的出發——

森

雅子

京都大學

はじめに

誰もが、知らぬうちに生きた時代の刻印を打たれる。だが、時代の刻印を打たれながらも、やがて新しい時代を作り出す人々もいる。周作人も、そういう人々のうちの一人である。彼は六十餘年にわたる文筆生活で、民俗學、兒童文學、新詩といった様々な分野でそれぞれ草分け的な仕事をしたが、女性論においてもそうであつた。彼は一九〇四年、女學雜誌『女子世界』に投稿することで文學的出發を果たす<sup>①</sup>。女性論、或いは性をテーマにした文章は、周作人の生涯に渡る文筆生活において幾年かの間斷はあるものの、

書き續けられていく。彼は學問的に體系だった仕事を残したわけではない。だが一九一八年には與謝野晶子の『人及び女として』中の「貞操は道德以上に尊貴である」を「貞操論」として『新青年』に翻譯發表し、この時期なかなか取り扱われなかった女性論を、時代の問題として提起することに成功した。また、五四新文化運動の最中には、郁達夫『沈淪』や汪靜之『蕙之風』の表現が「猥褻」と非難された際の援護や、「猥褻な」歌謠の収集によつて、中國文學における新しい性表現の領域を確實に廣げた。二、三十年代にはエリスを中心に性科學に關する翻譯や文章を積極的に發表し、四、五十年代には婚姻法に關する文章を中心に書き残す。周作人は「表現者」としての一生を「女性論」を書き續けることでも、全うした感がある。この論文は主に初期——つまり南京時代までに焦點を絞つて、その活動の根源に潜む契機を探ろうとするものである。

「文弱」から「豪俠」へ

周作人は一九〇一年八月、南京にある江南水師學堂機關

或る女性の影（森）

科にまず「額外生」として入學した。その後、純然たる八股文の試験を受け十二月に正式な學生となり、翌年三月からいわゆる「洋漢功課」を受けるようになった。それは、一週間のうち五日は洋文課、あとの一日だけ漢文課の授業を受けるというものである。洋文課では、英語、數學、物理、化學の課程と、機關科の専門授業が行われ、全て英語で講義されたのでそう呼ばれていた。<sup>②</sup>江南水師學堂は、入學試験は八股文が出題される傳統的なものだったが、英語で授業が行われるスタイルは當時としては開明的であつた。ただ、周作人自身が言うには、教師たちの教授法は、「本當にいい加減なもの」であつたらしいが。<sup>③</sup>しかし、こういった環境に身をおいたことが、早期に英語をものにし、のちに希臘語、日本語を習得して、世界の思想や文化を吸収する基礎を作った。『女子世界』に投稿した彼の最初の一連の文章全十編のうち、四編は翻譯物である。周作人という人物の最も際立つ特徴である「翻譯家」としての一面、或いは自ら「抄文公」と稱するように、自らの思想に見合った文章を引用したり翻譯したりして自分の言説を代辯さ

せるという方法の、初期の形がすでに見られる。ただ、『女子世界』における翻譯紹介には、周作人独自の確固たる主義と思想がすでに樹立されていたというよりは、まだ時代の主潮に寄り添う部分が多かつたけれども。

「英語」という言語面での新しい收穫とともに、周作人の心を捉えた出逢いはもう一つあつた。思想である。彼は南京へ向かう途中立ち寄つた「上海に觀光に來た田舎者なら、眞つ先に必ず立ち寄る、私とて例外でなかつた」青蓮閣外にて、通稱「野鷄大王」が並べ賣る革新的出版物を目にする。<sup>④</sup>田舎紹興とは明らかに違ふ空氣がそこには満ちていた。彼が南京にいた五年間のうちに讀んだ本や雑誌を挙げれば、枚舉に暇がないが、<sup>⑤</sup>彼がこの時期最もその思想に血を湧かせ、一讀歡喜して夜も眠れぬほど傾倒した思想家のことは挙げておく必要がある——梁啓超である。<sup>⑥</sup>そして彼の影響は、『女子世界』の文章に色濃く見られる。その文體も、「冷靜にして幽閑」と後に稱えられた周作人とは、別人のようだ。

一八九八年九月、變法自強が失敗した梁啓超は、日本へ

亡命する。「東京に一年間住み、少し日本語が讀めるようになったことで、思想が一變した。」また、云う。「戊戌八月に國外に亡命し、十月にはまた横濱で『清議報』を創刊しました。目を開き肝っ玉を据えて政府を攻撃したのは、この時が最も劇烈でした。政府の憎惡も頂點に達して、『清議報』の持ち込みを嚴禁し、しだいに中國内地で發行機關を斷絶させるようになったため、停刊のやむなきに至ったのです。」『清議報』は結局、一九〇二年、百冊目を迎えたところで停刊する。次に梁が手がけた雑誌は『新民叢報』である。『新民叢報』も横濱で發行されたが、それは大陸にどれくらい流布したか、梁自身は次のように語る。『『新民叢報』『新小説』などの雑誌を發行し、その主義をひろめた。わが國人は競ってこれを讀んだ。清朝は嚴禁したけれども、それをとどめることはできなかった。一冊發行されるごとに、中國内地では十數回も翻刻された。二十年来、學生たちの思想は、すこぶるその影響をうけたのである。』<sup>⑨</sup>

周作人もその、「すこぶるその影響をうけた」ひとりに

或る女性の影（森）

他ならない。彼は先ほど述べた上海青蓮閣外「野鷄大王」のもとで、「のちに『新廣東』と『革命軍』を求めた」と語る。『新廣東』は梁啓超派のジャーナリストである歐陽甲によるもので、一九〇二年に横濱新民叢報社から出版された別題「廣東人の廣東」という廣東獨立を主張する一冊。『革命軍』のほうは一九〇三年章炳麟の弟子鄒容が著し、革命排滿を謳いあげ清朝の罪業を糾弾し、當時の反清朝運動に火をつけた一冊<sup>⑩</sup>。梁啓超と章炳麟は言うまでもなく、これよりのち「保皇派」と「革命派」で歸着する主義は異なるが、少なくとも一九〇二年以前にあつては「革新派」という名目で一括できるだろう。周作人の場合をいうならまだ紹興にいた時分、つまり一八九八年に、中國が英・日・露・德・佛といった帝國主義列強に瓜分されるかという民族的危機の苦澁を嘗めている。その際、彼は日記に「洋人を驅逐するのはこの時に在り」だとか「我が族類に非ずんば、其の心必ずや異ならん」「臥榻の側に、豈他人の酣睡を容れんや」と認めているぐらいで、民族主義的な觀念もはつきり文字にしている。母國が國家的危機に直面

すれば、そのような氣持ちが沸き起こるのは當たり前だが。しかし南京での周作人は章炳麟ではなく、梁啓超の思想に染まっていく。それは、彼が發表した『女子世界』の文章に如實に表れている。思想に關していえば、彼はたんに時代が敷いたレールに乗っただけだった。しかし、どの方向を選んだのか。彼が表現の場として選んだのは、梁派の女性啓蒙論だった。それは、梁の主張が前述のように當時の思想的な主流だったからである。そして梁啓超の主張が廣く女性啓蒙論を容れたのに對し、當時の革命派の歴々は女性啓蒙論をほとんど口にしなかったことも大きく與つていよう。<sup>⑪</sup>

『女子世界』に表れた周作人の思想をみると、この時代の先端的な論調を示す二つのキーワードを、少なくとも自分のものとして文字化できるほどに吸収している。それは「無名の英雄」と「女傑」というものである。

まず、「無名の英雄」ということについて、梁啓超は一九〇〇年三月一日『清議報』第三十七冊に發表した「無名の英雄」のなかで次のように述べる。

今日中國の不振たる所以、患ひは英雄無きに在り。此の義人々能く之を知り、能く之を言ふ。而ども英雄無き所以の故は、患ひは無名の英雄無きに在り。此の義は則ち能く之を知り、能く之を言ふ者蓋し寡し。夫れ我が中國今日果たして英雄有るか、英雄無きか。吾得て之を斷ぜず。……我英雄爲ること能はずと曰ふ勿れ。我有名の英雄爲ること能はずと雖も、未だ必ずしも無名の英雄爲ること能はざるにあらず。天下の人々皆無名の英雄爲れば、則ち有名の英雄、必ずや是に於いて出でん。<sup>⑫</sup>

梁啓超のこの「無名の英雄」をまず輩出せよという主張は、徳富蘇峰の『靜思餘録』中の一編「無名の英雄」に影響を受けたものである。<sup>⑬</sup>蘇峰は英雄を城に比して、英雄を出すにはまず礎石が必要だ、と説く。梁啓超はこの思想を知つて、現在の中國に傑出した英雄がいなのは「礎石」のないためだと痛感し、まず英雄を造るための「無名の英雄」が必要だと説く。梁は潜在する「無名の英雄」たちを

啓蒙しよう」と、『清議報』或いは『新民叢報』に一群の「有名の英雄」の史傳を翻譯紹介していく。

だが、この未來の「英雄」たるべき中國人は何も男だけに限らない。そこで「英雄」の觀念を女性、來るべき中國の近代を造る新しい女性に當てはめるのは自然の成り行きであつたといつてよい。かくて「巾幗の英雄」は誕生する。

『新民叢報』第七號には、新しい女性として、馬君武が「女士張竹君傳」を發表した。彼女は清末、廣東で醫療活動に従事した女醫の草分けで、廣州に病院を開業し女性の醫學教育にも乗り出した人物である。<sup>⑭</sup>次に、『新民叢報』第十號には「女豪傑」と題する文章が掲載され、「身を捨てて世を救う」ものとして「女豪傑」が定義されている。

この時期『新民叢報』に限らず、羅蘭<sup>⑮</sup>夫人、貞德<sup>⑯</sup>らが女傑として紹介されていった。その他にも『新民叢報』第四年第二十四號<sup>⑰</sup>には「法國三女傑」として「(其の一) 救亡女傑貞德(其の二) 革命女傑羅蘭夫人(其の三) 刺奸女傑哥爾地<sup>⑱</sup>」の肖像畫が掲載されている。こういった女傑たちは、梁啓超の主筆した雑誌だけでなく、清末の

新しい女性像として、當時次々に刊行された女學雜誌でも大いに喧傳されていく。<sup>⑲</sup>

周作人がはじめての表現の場として選んだ雑誌、『女子世界』は丁初我によつて一九〇四年一月に上海で創刊された。編集と主な投稿者には、柳亞子や曾樸、そして一九〇三年に發行された『女界鐘』に「自由を愛する者金一」という署名で優れた女性啓蒙論を唱え、「中國女界のルソー」と讃えられた金天翮らが名を列ねている。<sup>⑳</sup>

『女子世界』では、女子教育に關すること、また日本に留學した中國の女子からの報告等が毎號掲載されているが、そのなかでも目を引くのが、梁啓超の主張を受け繼いだ「巾幗の英雄」——「女傑」という觀念をもとにした文章である。例えば『女子世界』には、「女軍人傳」「花木蘭傳」「少女義俠」などの文章が發表された。

周作人は『女子世界』第五期(一九〇四年五月)に初めて「死生を説く」と「花」の字を以つて女子の代名詞とすべからざるを論ず」という二篇の文章を發表した。この「花」の字を以つて女子の代名詞とすべからざるを論ず」で彼は次

のように述べる。

……二十世紀は則ち將に陌頭楊柳、夢裏刀環の感情に代へて、彈雨槍林、胡地玄氷の滋味を嘗めんとす。

美世兒か？ 瑪尼他か？ 羅蘭夫人か？ 異人の任に非ざる也。故に二十世紀の女子は、妍麗を尙ばずして豪俠を尙び、粗豪を憂へずして文弱を憂ふ。今の人は毎に女子に字して花と曰ひて、女子に唐突たり。……秋を望んで先に零れるの花は文明の母の女子の徽號として、吾女子の受けざる所の者也。今の花を以て女子に字する者は、猶ほ輕視の心あり。女子の花を以て自ら命ずる者は、未だ依附の習ひを脱せず。吾甚だ吾同胞姉妹に、一にこの惡根性を脱するを望む也。<sup>⑩</sup>

ここで語られる「妍麗を尙ばずして豪俠を尙び、粗豪を憂へずして文弱を憂ふ」という女傑の像は周作人の『女子世界』における重要なテーマである。ここには「美世兒」「瑪尼他」「羅蘭夫人」の「女傑」の名が登場する。「羅蘭

夫人」は、フランス革命のジロンド派最高リーダーであったが、對するジャコバン派に捕まり處刑された人物である。彼女のことを特に「近世第一女傑羅蘭夫人傳」として、梁啓超が『新民叢報』第十七號に發表して以來、清末にはソフィア・ペトフスカヤと共に、人口に膾炙する「女傑」の代名詞となる。「異人の任に非ざる也」、「羅蘭夫人らのような特別な「有名女傑」だけでなく、名もなき普通の女性も「豪俠」たれ、と周作人は訴える。

周作人が唱える「女傑」像が全く時代の影響下にあったことが窺える文章は、一九〇六年に發表した「女禍傳」である。これは、先にも觸れた『新民叢報』第十號に掲載された「女豪傑」<sup>⑪</sup>の主張に基づいている。「女豪傑」では、妹喜や妲己は今まで國を亡ぼした妖物とされてきたが、亡國論で括れば、英雄とされてきた伊尹や膠鬲とその罪は等しい。伊尹や膠鬲らが英雄ならば妹喜や妲己らはむしろ孝ある女俠だとして、「惡女」とされてきたものを「女豪傑」という新しい概念を用い肯定するものである。周作人はその「惡女」の例を西洋にまで擴張し、その起源を『舊約聖

書』のイヴに求め、女性だから天下の罪をその身に責めるのは濡れ衣も甚だしいとして、それまでの概念を百八十度覆している。

周作人は、「女傑」「文弱から豪俠へ」という思想を軸に一九〇六年（第十六、十七期）まで『女子世界』に文章を発表する。その中でもこの時期の代表的なものとして、小説「俠女奴」がある。これは『千一夜物語』の「アリババと四十人の盜賊たち」を翻譯したものだが、アリババではなく、我が身の危険を厭わず主人を助けた女奴隷マルジャーナを中心に据えている。一九〇五年に小説林社より出版され、周作人の最初の譯書となった。その際に附された「『俠女奴』説明」で次のようにいう。

曼綺那たる者有り、波斯の一女奴也。機警にして急智有り。……其の英勇の氣、頗る中國の紅線女俠と類す。沈沈たる奴隷に、乃ち此の奇物有り。亟やかに歐文より之を移譯し、以て世の奴骨天成たる者に告げん<sup>②</sup>。

或る女性の影（森）

不思議な呪文で財寶を手に入れたアリババでなく、盜賊たちに煮え湯をかけて殺す勇敢な女奴隷にライトをあて、「俠女奴」というタイトルにすること、物語の重點を彼女に移している。周作人はもとの物語から、「無名の女傑」であるマルジャーナを見出した。明らかに、女豪俠贊美の視點である。

『女子世界』にはもう一編、同じ主義の翻譯がある。それは第十三期に發表された「女獵人」<sup>③</sup>というものだ。今のところこの小説の本文を見ることは出来ないのですが、内容の詳細については分からない。だが、彼が附した「譯者附記」が中身を推測するひとつの手がかりとなるだろう。曰く、

作者吾が國の女子日びに文弱に赴くに因るの故に、組むに理想を以てしてこの編を造る。……然れども聞く、理想なる者は事實の母なりと。我今日此想いを作すは、安んぞ知らん、他日人の繼起して之を實踐すること無きを。人の發揮して之を光大ならしむる有る



は、是吾が姉妹に在り。……或るひと謂へらく、女獵人を傳するは女軍人を傳するに如かずと。然れども女軍人は有名の英雄にして、女獵人は無名の英雄なり。必ず先に無名の英雄多くして、しかる後有名の英雄出づ。故に我、鐵血の事業を傳するに暇あらずして、騎射の生涯を傳するなり。<sup>26)</sup>

「俠女奴」のマルジャーナも「女獵人」もただ、女傑であるというだけでなく、彼女たちには「無名の」という形容詞が付けられる。周作人はこの時期、羅蘭夫人や貞徳のような「有名の女傑」が出現するにはまず、歴史の光に照らされることのない礎石である豪傑を多く生み出さねばならないという思想に共感していた。梁は「有名の英雄」を生むには、まず「無名の英雄」を輩出せよ、と説いたが、女性啓蒙の場では、「羅蘭夫人傳」のように、「有名の女傑」像を傳えていった。對して周作人がこの時期、特に「無名の女傑」という思想を専らにしていることに注目しておこう。

この「俠女奴」を取り上げた理由について周作人は、回想録で次のように述べる。「(英譯)『千一夜物語』を偶然手にいれ、外國の文章に興味を持った。この一冊は私の物言わぬ教師となってくれた。……讀んでみて腕前を試してみたいとうずうずし、「アリババと四十人の盜賊」を選んで試してみることにした。これは世界でも有名な物語であり、おもしろかったから續けて翻譯した。」<sup>27)</sup>「俠女奴」は周作人にとってはじめての翻譯であり、「學堂での英語のできぐあい」、自らの英語學習の成果を試すものであった。

「女獵人」も恐らくは殆んどそれと違わなかつたろう。しかし、こうした言い方は『知堂回想録』での彼の常套手段で、實際の半分或いは四分の三程度にしか言わないことがままある。ここでもそうで、もちろん英語學習のためもあっただろうが、むしろ當時の彼をめぐる思想的状況とこの作品の内容自體とを考えるなら、「無名の女傑」という觀念を史傳という枠組みで提示したことの方に重點があると思われる。

なぜなら、梁啓超の『新民叢報』における特徴として、

史傳の翻譯ということがあるからだ。その中でも先に挙げた「羅蘭夫人傳」は一世を風靡したし、また、女傑物から離れてみても、彼は「匈加利愛國者噶蘇士」<sup>（エコトシ）</sup>傳」「意大利建國三傑傳」「新英國巨人克林威爾」<sup>（ウグエルム）</sup>傳」などを紹介している。これらはすべて、史傳として一括できる。梁啓超のこの時期の史傳の翻譯について、松尾洋二氏は「ジヤナルとしての史傳」は當該時期の東アジア全域において、社會、歴史、政治、人間を考察する上で、奔流の如く、一つの基盤的機能を擔っていたのであり、梁啓超はその奔流の中に居たし、また、その奔流を起こしてもいた。それは社會、歴史を考察するに人物の傳記を以つてするという東アジア共通の傳統的認識方法でもあった。それに西洋の評傳という新たな形態が加わる。新しい事物、概念を受容していくうえで、自社會にない概念を直接導入することは不可能に近い。その媒介として、傳統的、かつ具象的な形態たる史傳が、諸種の著作の選擇、取捨、翻譯、大膽な縮譯、獨自の見解の挿入である「纂譯」という獨特の優れた形式をもって、新たな様相のもと生成していたのである。」と

或る女性の影（森）

言う。<sup>②</sup>周作人のこの時期の二つの翻譯「俠女奴」と「女獵人」は、兄魯迅の「スバルタの魂」同様、こういった梁啓超のスタンスに倣ったものではなかったか。周作人は梁啓超から「史傳」という枠組みを借り、そこに梁の主張する「有名な女傑」傳とは異なる、「無名の女傑」の像を嵌め込んだのだ。その翻譯の素材としたものは、英語學習の爲に購った「學習書」であつたが、彼はそこから「無名の女傑」という自らの求める像を選擇した。そしてこの像には、後に述べるが、周作人の個人的な體驗に根ざす獨自の契機が秘められている。

周作人が『女子世界』に發表した文章は、あたかも彼自身がまったく女傑に心酔していたかのように見える。確かに當時の彼は、「女傑」というような、若い血を滾らしめるに充分な、扇動的な理想像に陶醉してはいたのだろう。しかし、それは彼の本質ではなかった。後の周作人は女性啓蒙論を唱えるとき、「女傑」というように、明確にして激烈な理想像を持ち出さない。彼の理想は、のちに與謝野晶子の「貞操論」を翻譯することからも分かるようにあく

までも過激ではなく、穩健である範疇を超えない。この時期の一連の女性啓蒙論はまったく時代の波にのつて書かれたもの、つまり、一種のはしかのようなものと考えることができるだろう。『女子世界』への投稿以降、周作人の主義主張において、梁啓超からの影響ははっきりとはみられない。だが、世界に目を開き有効と考えられるものは積極的に取り入れていく、という開明的で自由なスタンスには、無意識だったかもしれないが、梁の影響は深くまで浸透していったことができる。

「女傑」と違って、周作人の『女子世界』における文章で彼が意圖的にか無意識にか、言及しなかったことがある。それは「女權」である。夏曉虹氏によると、この「女權」ということばを「清末の男女平等提唱者は、どんどん用いるようになり、自らの考えを述べるようになった。そこに含まれる新しい思想に魅せられて、この時期の詩文でも、われ先にと「女權」を口にし、女性に贈る詩では缺かすことのできない一言となった」という。<sup>②③</sup>『女子世界』を創刊した丁初我や柳亞子もこの「女性の権利の獲得」というこ

とに對し、樂觀的な態度をとっていた。<sup>②④</sup>柳曰く「十年ののち、女子世界が成立すれば、選舉、代議全において平等となり、我が「女界を哀しむ」のことも消滅する日がくるだろう。」<sup>②⑤</sup>周作人が「女傑」同様當時の流行であった「女權」という言葉を自らの文章に取り入れなかったのは、彼が「中國で」この權利が一般的となることに後々まで懷疑的であったこともあろう。二十年後の一九二七年に發表した「北溝沿通信」でも「女性の參政にはあまり賛成しない。それは民主政治の行われている國においてのみ、呼びかけることができると思う。たとえ實現されてもあまり意味はないだろう。中國ならば、いくらかの女政客と女陣笠連を生み出すに過ぎない」と述べる。<sup>②⑥</sup>たとえ、『女子世界』に投稿していた當時、このような考えを持っていたとしても、創刊者たちの思想的主流が「女權」獲得への期待と樂觀に膨らんでいた頃、自ら一步進んでそれに反論することはしなかった。彼が女性の選舉權獲得について意見を述べるのは、『天義報』に表現の場を移してからである。<sup>②⑦</sup>しかし、何よりも當時の彼はまだ「女權」ということを意識し

ていなかったことのほうが大きいだろう。「女權」を獲得する以前の段階、まず女性が強くなければならないという「女傑」の觀念を受け入れるところで止まっていたのだと考えられる。一連の文章は時代の波に乗って書かれたものとはいえ、本質的には、彼自身の内的要求に迫られたものである。その内的要求は彼の個人的な體驗と密接に結びついていたから、「女權」についてはまだ、問題としては視野に入ってこなかったであろう。

周作人が『女子世界』に發表した文章は、梁啓超らが興した時代の奔流の中に身を委ね書かれたものであることが分かる。だがそこにも、彼の獨自性は見られる。「無名の女傑」の誕生をアジテートする點である。だが、いうまでもないことだが梁啓超は女性啓蒙論を専らにした思想家ではない。それは數ある彼の「革命的」思想・主張の一翼であつたにすぎない。それでは、周作人はなぜ梁の思想から一身に影響を受けながら、政治的、思想的な場ではなく、當時の女性啓蒙論の場において、自らの文學的出發を果たさねばならなかったのか。

或る女性の影（森）

#### 女學雜誌の執筆者

中國において女性が「雜誌」という表現の場に關つたのは、一八九八年の『無錫白話報』に文章を發表した裘毓芳が最初といわれる。<sup>③4</sup>一九〇〇年代に入つて、女學雜誌が相次いで創刊されたが、創刊者、執筆者はほとんどが男性であつた。<sup>③5</sup>周作人が投稿した『女子世界』も創刊者は常熟出身の丁初我である。そこに女性の名前で掲載された文章も例えば、「黎里不纏足會緣起」を書いた「吳江女士倪壽芝・慕歐」、「中國女劍俠紅線聶陰娘傳」の作者「松陵女子藩小璜」は柳亞子であるし、『新小説』に「東歐女豪傑」を發表し、『女子世界』にも「東歐女豪傑中作」の詩を寄せた「嶺南羽衣女士」は羅普、<sup>③6</sup>というように實は女性の名前を借りた男性によるものである。「才の無いことが美德」とされた中國の女性にはリテラシーの缺如がまず大きな壁としてあつたし、それを備えていたとしても外の社會と自分との關係を認識し、自ら雜誌を興そうと行動するに至るものは皆無ではないにしろ、ごく少數であつた。梁らから

新しい女性啓蒙論を吸収し、自らも論を展開し、實踐しようとするものは、最初のうちはやはり男性であつた——その男性も勿論ただ「男性」というだけでなく、當時においては高い知識を持ち、進取性を備えた「男性」であつたわけだが。梁啓超によって唱えられた女性啓蒙論を實踐する形で女學雜誌の創刊者や中心人物が男性であるのは首肯するに容易い。しかしより多くの女性の讀者を獲得し、或いは實際に参加してもらうため、女學雜誌も一般の讀者に門戸を開くことになる。當時の讀者の多くは女學堂の學生であつたため、編集者たちは一般讀者の投稿欄に女學生の文章を載せることを重視したという。『女子世界』にも「女學文叢」の欄が設けられ、そこには「十四歳女子」や「四十歳女士」といった肩書きのつけられた「女性」の投稿が掲載された。これら「女性」の投稿が本當に「女性」のものであつたか、今確かめる術を私は持たない。このことに關して、日本を比較にとつた場合、初期の一般的な新聞においてはかなりの部分女性による投稿が寄せられたが、例えば『女新聞』、女性のための新聞を趣旨としたものは、

その投書欄はほとんどが男性によって占められていたという。<sup>③</sup>日本に比して中國は比較にならぬほど女性のリテラシーが低く、辛亥革命後の一九二二年に『婦女時報』を刊した包天笑は言う。「當時の婦女は、知識水準も高くない、大多數は文字を書くこともできなかったので、この『婦女時報』の中で、本當に婦女の手による文章はきつと二、三十パーセントに満たなかつたろう。」「『女子世界』からおおよそ十年経つても、まだこのような状態であつた。また、秋瑾は「我が姉妹の十人中八、九人は文字が讀めぬ。簡単な雜誌であれば、白話同様讀むことはできる。もしも難しければ、まったく理解できぬ。」と言つて、女でも讀める白話を多く用いた雑誌を創刊する。ここで「難しい」と批判されたのは『女子世界』だつた。だとすれば、『女子世界』の文章はほとんどが（明らかに女性と斷定できる文章を除いて）男性の手によるものと推測していいだろう。そして、周作人も、「女性からの」投稿を掲載する欄であつた「女學文叢」に「會稽十八齡女子 吳萍雲」の名で文章を發表したのだつた。

周作人は女性の名前で投稿した當時のことを回想して次のように語る。

この萍雲という名前も當時の別號の一つで、例えば日記に見られる不柯、天歛、頑石同様、ほどなくして使わなくなった。しかし、女子世界に文章を投稿する關係から「女土」の言葉を加えた。萍雲というのはたんに、漂泊して定まらない意味を取ったにすぎぬ。碧羅はどんな由來だったか知らん、今ではどんな意味があったかすっかり忘れてしまった。「秋雲は羅の如し」の典故だったか、もしくはその時の思いつきにすぎず、すぐに使わなくなったのかもしれない。萍雲の名前は『女子世界』でも用いている。その署名で『舊約聖書』のエヴァの物語を抄譯し、「女禍傳」として投稿し、女性のために不平不満をぶちまけたのが記憶にある。若い男には女性のふりをして雑誌に投稿するのを好む時期があるものだ。別に編集者様が女性からの投稿を重んじ男性からのものを軽んじるからというのを

或る女性の影（森）

馬鹿にしたわけではない、それは一種の初戀のかたちで、少女を慕わしく思う氣持の表れだ。自分にもこういった経験があるからのちの若者が同じことをしても、嘆かわしく思ったり非難したりはしなかった。<sup>⑩</sup>

周作人はここで、女性の名前を使って投稿した理由を「若い男には女性のふりをして雑誌に投稿するのを好む時期があるものだ」と一般化して説明する。だが包天笑が言うように、女性の識字率、知識ともにまだ充分でない時代に、男が女に化けて書くのは普通の場合としてあったわけだ。まして女學雑誌『女子世界』の場合は先に述べたように、讀者である女學堂の生徒を刺激し、投稿を「誘發」するためだったろう。『女子世界』と銘打っている以上、女性の書き手が多ければ多いほどいから、多くの男性が女性に化けて書くという行爲が生まれる。ちなみに、「女子世界」という言葉には、或る意味が込められていた。それは柳亞子が「女性を哀しむ」という文章の中で用いたもので、「女權」の流行を背景とし、意味するところは、男女

が完全に平等で同等の權利を享受する新社會ということ、  
そういった含意のある「女子世界」の名を冠する雑誌に、  
まだまだ女性からの投稿が少ない中、男が女になり代わっ  
て書くのは普通のことであつたに違いない。周作人は女性  
の名前で書いた理由を何も、「若い男には女性のふりをし  
て雑誌に投稿するのを好む時期があるものだ」などと、わ  
ざわざ言わなくてもよかつたのである。——周作人特有の  
韜晦、或いは含羞である。なぜなら、「それは一種の初戀  
のかたちで、少女を慕わしく思う氣持ちの表れだ。自分に  
もこういった経験がある」というのは本當のことで、「初  
戀のかたち」で「少女を慕わしく」思い、自らの戀愛を筆  
名に込めたのはほかならぬ、彼自身だからだ。そしてその  
個人的な體驗が彼を、これから表現の一分野となる女性論  
へと導いていく。

秋 田 夢 平——周作人の戀

周作人がなぜ、女學雜誌に投稿することで自らの文學的  
出發を果したのか。それは、ここでの周作人の「辯明」

の眞意を考へてみることで謎は解ける。

彼はこの時期、或る女性を慕わしく思つていた。一體ど  
んな女性に想いを寄せたのか。限られてはいるが、残され  
た資料によつて、その戀の迹をたどつてみよう。彼女のこ  
とは彼が、二十年代に入つて書いた「娛園」の文章で語ら  
れる。

いつの年だつたか、屹度庚子<sup>一九〇〇年</sup>以前のことだつ  
たろう。當時舅父の一人息子が結婚することになり  
……、いとこたちが一堂に集まつた。男の子が全部で  
十四人、女の子が七人。そのなかに私と同年同月生ま  
れの子がいた。私は彼女をお姉さんと呼び、彼女も私  
のことをお兄さん、と呼んでいたものだ。私はもともと  
と「醜いあひるの子」、誰の注目も集めない子どもだ  
つたから、彼女に對して密やかな想いを抱いていた。  
無論片思いで、しかも彼女には幼い頃からの許婚があ  
ると分かつていたから、それ以上の分不相應な想いは  
抱きようがなかつた。しかしそれでも彼女には抗い難

い魅力を感じていた。今思い出してみてもそこにはトルバドゥルの餘韻があるように思う。當時私たちは留鶴庵に住んでいて、彼女たちはその二階に住んでいた。晝間、彼女たちのいないとき、私たちが年の若いものは「隙に乗じて悪さを」し、二階に上がっていつてはものを盗って食べたものだ。ある日、みんなで二階で騒いでいる時に、私は無意識のふりをして、彼女の雪青紡細紗を引つ被つて舞い始めた。彼女の弟も一緒になって騒いでいたが、私の意圖は見破られずに済んだ。この一件には、随分満足した。のちに木下李太郎の『食後の唄』を読み、「絳絹裏」の一首を見つけ、この時の氣持ちを思い出さずには居られなかった。

床の間の筆をとりにと／土用はしの下をくぐつたら  
／小袖の裾に觸れた。／なんとも云へぬ亂れごころに  
／はつと思つて首は引いたが、／南無、神も咎めたま  
はじ、／今は亡き人のかたみなれば。

或る女性の影（森）

南京に居た頃、日記にはたくさん、傷心を癒すことを書いたが（後になって全部切り取ったから、今ではもうその内容は思い出せぬ）、結局結婚のことは思いもしなかった。よそを十二年間ぶらついたのち、故郷に戻ってきた時には、私にはこどもがあつた。彼女も疾うの昔に嫁いでいたし、病氣を抱えてすでに死に直面していた。そのあとも何度か會つた。私は再び故郷を離れ、彼女もほどなくして無事にこの世を去つた。今でも彼女の若い頃を寫した一葉の寫眞が、母の處にある。なぜなら彼女は自分が母の義理の娘である、と言つていたから。正式な儀式によるものではなかったけれど。

舅父の一家がみな逝つてしまつてから、二十年の間、再び娛園を訪れる機會はない。屹度、昔よりも随分荒れ果ててしまつたことだろう。だがその印象は今もひつそりと私の腦裏に残っている、私のこのころの炎（Fiannetta）の餘光に照らされて。<sup>12</sup>

想いを寄せたのは、新詩「彼女たち」に詠われる「嫁い



で亡くなった」「ただひとりの、薄れかけた姿だけが残っている」「彼女の寫眞は母のところにあるけれど、貰ってきて、見ようとは思わない」「はつきりと想い出せないほど、私は彼女のことが忘れられない」女性である。<sup>④</sup> 名を酈永平といった。「娛園」では「このころの炎 (Fiammetta) の餘光に照らされて」とさりげなくいつているが、Fiammettaとはまさしくボツカチオの生涯のミューズ、マリアである——彼の作品では Fiammetta という名で登場する。永平のことを Fiammetta に暗に、しかし大膽になぞらえている。「このころの炎」とはつまり彼女に對する、消えることのない戀情なのだ。周作人にとって、彼女が生涯のミューズであつたかどうかはともかく、すくなくとも彼にとつては生涯、忘れ得ぬひとであつたことは確かであろう。酈永平に關して、詳しいことは分からない。ただ、周建人が、作人の片思いの相手としてではなく、むしろ魯迅の結婚の對象として、あるいは「從姉」として比較的多くの回想を残している。それによれば、「平姉さんは美貌の娘で、うちの母には娘がなかつたから、彼女を義理の娘としたの

である。兩親は彼女を可愛がつていた」という。<sup>⑤</sup> 周作人の母魯瑞の姉である魯蓮と酈拜卿の間に生まれ、母方のいとこにあたる。<sup>⑥</sup> 紹興の風習では母方のいとこというと、もう一つの意味を持った。同姓であれば、同族でなくても結婚できないが、姓さえ違えば、たとえ母方のいとこであっても血筋が近くとも、結婚できるのだ。<sup>⑦</sup> つまり、永平は充分に周氏兄弟の結婚對象となる資格を備えていた。しかし彼女は、口約束程度のものであつたが、魯瑞の義理の娘となつていたので彼らの結婚對象とはならなかつた。<sup>⑧</sup> 周作人が「結婚のことは考えもしなかつた」というのは永平に許婚があつたというだけではなく、こういった背景もあるのだろう。或いは清末にあつて「自由結婚」という概念は出つつあつたが、彼自身がやはり社會的規範に囚われていたからかもしれない。だが、それよりもむしろ、周作人には性格的に一歩前に出ようという情熱の缺如があつたと思われる。

やがて彼女は許婚だつた車耕南のもとへ嫁いでいく。その結婚生活を周建人は次のように語る。

麗の家の平姉さんは車の家に嫁ぎ、夫である耕南とは不和だった。車の家にはお金も勢力もあったが、家の中は烏煙瘴氣、後に舅の財産は盗まれて、妾の産んだ立派な息子も攫われてしまい、この舅は發狂した。

平姉さんは結婚して何年にもなったが、子どもが生まれず、妊娠してもすぐに流産してしまった。流産の後、出血が止まらず、體の具合も悪く、鬱状態になった。

彼女はひどく苦しみ、よくうちの母のところに来ては「お母さん、あんな家でどうやってたらやっていけるっていうんです！ 本當につらいのに。」と泣きながら訴えていたものだ。<sup>48</sup>

彼女は結局、この時の出血がもとで亡くなった。それも、周作人の母が西洋醫に診てもらうように勧めても、夫と姑が西洋醫などに診てもらうことには賛成しないし、彼らに文句を言われ顔色を窺いながらの生活は耐えられないと、頑として聞き入れなかったという。彼女はやがて不幸なままにこの世を去る。<sup>49</sup>

或る女性の影（森）

周作人は「娛園」の文章で「南京に居た頃、日記にはたくさん、傷心を癒すことを書いたが、後になって全部切り取ったから、今ではもうその内容は思い出せぬ」とは言っている。しかし、日記にぶちまけた永平への想いを總て消し去ったわけではない。日記を開けば、人知れず密かに遺されたその痕跡を、今でも私たちは辿ることができる。

彼は自らも認めるように、南京に居た頃、日記の中で様々な名前を用いた。例えば梁啓超に魅了され「歙冰室」と、はたまたクロムウェル傳を讀んでは感激し「克郎」と。<sup>50</sup> そのなかで、數ある號の一つに「秋田夢平（夢屏、夢枰）」というものがある。これは一九〇二年三月の日記において初めて登場する。——これこそが、彼が切り取ることなく遺した、自らの戀の片鱗である。

「日記第八 秋田夢屏（壬寅<sup>一九〇二</sup>）三月四日燈下識於白門〔夢〕旅舎」、一八九八年から付けはじめた日記が、八冊目を迎えたときの記述である。周作人、十七歳の時である。それから約三ヵ月後、八冊目の終わりに、「蕙川櫓仙小傳夢平譚」として、戊戌の冬に亡くなった弟の追悼文を認め

る。曰く「薏川蔭仙、名は椿壽、字は畝亭、秋田夢平の幼き弟である。……六月十四日、浪華舊遊子 秋田夢平、誤言、即ち支那<sup>支那</sup>五月九日也。」そして日記第九に「秋田夢平」のサイン。「夢平」の名が使われるのはここまでである。

次に用いられるのが、「萍雲」である。それは、翌一九〇三年正月の日記の冒頭に登場する。「白門漫遊歴史／四十五記之五十四年／一月至四月／一百二十天／萍雲氏」であるが、ここで、「一月至四月」「百二十日」と明記してあることから考えて、十冊目の日記が終った四月三十日に記したのである。「七十五癸卯五月（一九〇三年四月三十日）」に日記を毎日つけるのをやめる理由が記され、その最後にも「越人 萍雲書」と記される。

「夢平」という名は、周作人が南京にいたこの頃、永平を慕わしく思っていたことからして「平姉を夢む」というわけだ。そして、その延長として「萍雲」の名が登場する。彼の言によれば、若い男には少女を戀うて女の名を使う時期があるという（作人もそう言うが、想いを寄せる女性の名にちなんだ筆名を使った具體的な例が一體どれ程あるの

かは不明である）、そうすればこの「萍」は明らかに「平」の言い換えである。周作人は當時、「萍雲」のほかにも、「平雲」「病雲」の名を使っている<sup>⑤</sup>。それから——「秋田」「秋津」「秋草園」或いはこの時期のもう一つの筆名「碧羅」の由來という「秋雲は羅の如し」など、この時期の彼の日記、特に永平に關することには「秋」を含んだものが多い。「秋」は言うまでもなく、うら寂しくすべてが凋落へと向かっていく時節、彼は一九〇二年の時點で、自分の想いが成就しないことを豫感しているのだ。まだ、車耕南との結婚が現實のものとなっていない時期から、彼の戀は、最初から禁欲的なものであった。しかも「醜いあひるの子」であるという引け目、文章からも窺えるように人一倍含羞の激しいと思われる周作人の想いが永平に届いていたかどうかはおろか、永平に自らの想いをそれとなく氣づかせる仕草ができていたかどうかすらも疑わしい。それに永平にしたところで、周作人のことをどう思っていたかも今となつては分からない。やはり、周作人自身が言うように、彼自身が胸に秘めた密やかな想いだったのだろう。

そして、一八九八年からほぼ六年間續いてきた記日體の日記は、この「萍雲」の名が記された一九〇三年四月三十日をもつて書かれなくなってしまう。以降翌一九〇四年三月までは記事體の日記が續き、四月から十一月までの日記は脱落する。日記の脱落する時期に、彼は『女子世界』に投稿を始める。記事體になる冒頭で次のように言う。「世界には過去、未來があり現在はない。現在の無い世界なのだから現在の我はない。現在の我、それは我に非ずと言う。然れども我に非ずというからには、明らかに我は存在し、明らかにこの世に我の位置を占めている。故に我に非ずといいながら、我のなかつたためしはない。我が存在しないことはないのだから、即ち我は存在する。」虚無の中からの自己肯定だが、その肯定はあくまで消極的である。爾來一九〇五年まで、彼の日記は虚無的な雰圍氣に満ちている。周作人は回想して次のように言う。

南京に五年間居て、一體何を學んだか。ありきたりの科學知識のほかに別段、特別なことはなにもなかつ

或る女性の影（森）

た。しかしよかつた點もあつて、一つは外國語を學んだこと、もう一つは文語を上手く使えるようになったことだ。それで自由にものが書けるようになり、舊詩も書くようになった。大まかにいえば、それらは浪漫な思想であつた。外國の人道主義、革命思想、傳統的な虚無主義も、金聖歎や梁任公の新舊の文章からの影響もごちゃごちゃに入り混じつていた。

周作人はそれが顯著に表れているのが一九〇四年であるという。確かに一九〇四年十二月の日記「秋草園日記甲」には「世界に我あるや、すでに二十年。然れども二十年前に我はなく、二十年の後にも必ずや我はない。則ち我の我爲るや、亦僅かに弱草に棲む輕塵の如く、指で彈けば終に寂滅に歸する。」と記される――だが、虚無的氣分は一九〇三年四月三十日にすでに始まつている。その理由を考えるため、すこし遡つて日記を見てみることにしよう。

一九〇三年三月六日、「今日の學界の風潮」はこんなに

も急であるのに、教育を司る諸君はほんやりして目を醒まさぬ。屹度洪水に溺れてしまふに違ひない。」この頃、江南一帯では學校や教師の腐敗に對する學生たちの反亂が起き、各地で退學事件が起る。周作人も退學した學生に激勵の手紙を送る。同月二十八日、『蘇報』に浙江大學堂の退學事件の記事が載っていた。周作人は退學した學生を報じてある中に、或る人物の名を見つける。それは「車幼常というもので、私のいとこ麗の妹の許婚である。會つたことはないが、名を聞いたことはある。會つて一言ことばを交わし、私の愛郷の意を盡くしたいと長いこと思っていたものだ。」翌日、彼はやはり車耕南に手紙を出したが、「車君に出した手紙は届かなかつたかもしれない。残念だ」。なぜなら退學した學生はみな實家に戻つたからである。四月七日のことだつた。

周作人自身は魯迅から「退學せぬように」との手紙を受け取る。そして四月二十八日、友人の一人、胡韵仙が西太后を痛罵する文章を書いたとして學生監督に叱責され、胡も退學しようとする事件が起る。結局退學はしなかつた

が。その二日後、周作人は先に述べたような虚無的な文章を記す。これらの虚無的な記述は、青年期にありがちな一種の憂愁、とすることもできよう。だが、たんにそれだけで片付けられないように思う。何か彼の存在自體を搖るがすような出来事が起つたのだ。以降日記は斷續的になり、脱落した部分が多くなる。

私はここで推測する。車耕南が實家に歸つて、永平との結婚話が具體化したのではないか、と。例えば蘇州出身の包天笑は一八七六年の生まれ、周作人よりも十ほど上だが自分の結婚を回想して次のように言う。「私は二十五歳で結婚した。妻も私と同じ年で二十五歳であつた。……中國人はほとんどが早婚である、とくに江南では、二十五で結婚というのは當時すでに遅いものだつた。親戚についていえば、大半が二十歳以内に結婚しており、十八、九が最も多かつた。」<sup>⑤</sup>永平は周作人と同年同月生まれだから、當時十八歳である。南京にいた周作人は、四月二十七日に、紹興にいた建人から二十二日付の手紙を受け取っている。そこに、永平の結婚が具體化されたか、執り行われたかの報

せが書いてあつたのではないだろうか。

彼女が亡くなるのは、まだ後のことであるが、一九〇三年三月に車耕南が退學し結婚、その報せを知つた周作人は何も手につかなくなり、虚無感にさいなまれる。永平の結婚生活の話は母や建人から、或いは周作人が實家に歸つたときに直接見聞きする。永平は、結婚してから周作人の母を訪ねてきているのだから——このように推測することは、不自然ではない。そして、この時期に永平が結婚したとして、それから約二年の後、周作人が彼女の悲惨な結婚生活を知つてショックを覚え、書いたと思われる記述は今も遺されている。

「終日風雨、夜に入りて雪」——一九〇四年十二月二十日の日記の記載である。そして今、二十三日となつてゐるところまで切り取られてゐる。また四日後の二十四日の日記には次のように記してゐる。

覆水盆に返らず。達人からこれを見れば、必定のことであるが、こころの傷ついた人に見せてはならない。

或る女性の影（森）

私我が國の婦女界を見るに、婚制は不良、一たび誤てばもう挽回できない。人生はいつたいどれくらいのか。百年は一瞬にして過ぎる、それを悲惨な世界に身を置いてむざむざと一生を過ごすなど、我々男性の感慨に比べてそのつらさはどれほどのものだろう。花落ちても枝に返るといふ、そんな莊嚴（しょうげん）世界を私はただ、夢の中で見るしかないのか。

この後から、今、二十六日とされている部分の前まで切り取られてゐる。「終日風雨、夜に入りて雪」、一見すればたんに天氣のことを書いてゐるように見える。だが、當時の日記の前後に天候を記した日などない。その後が切り取られてゐること、そして四日後に上の記載が現れることを考えれば、たんなる天候の記述に見えるこの一言は、その日の周作人の心象風景であることが分かる。永平の結婚生活の實情——彼女の結婚が實に不幸なものであつたこと——をこの時期彼が知つたのだらう。

以上が周作人の場合の、花咲かぬまま萎れた戀の一部始

終である。

「好花枝」と「荒磯」

先に引いた一九〇四年十二月の記述に關してだが、當時の婦女界について、日記において何らかの慨嘆を記すのは後にも先にもここだけである。周作人は當時の婦女界や婚制の不良に對する嘆きを、一般的な慨嘆として書いているように見える。しかしこの慨嘆は、實際には、永平によって引き起こされたものだ。それは傷ついた人——周作人には見るに忍びない現實であつた。しかし、一般的な慨嘆にも取れ得るから、彼は遺したのだ。「失戀」しながらも、ただその熱情をぶつけるのではなく、相手の置かれた境遇を冷靜に見つめ、また、それを自らと切り離して文字にする。この些かの臆病さをも含んだ冷靜な視點は、周作人の發表した『女子世界』のアジテーションの文章の裏に潜んだ、彼の本質である。

日記の一文は、翌年一九〇五年『女子世界』第十三期に「好花枝」と題し發表された。そこでは「婚制の不良」と

いう言葉ははずされ、ただただ風雨に吹かれて落ちた花を嘆き哀しむだけで、何もできない「文弱」な少女を主人公にする。

阿珠夜に綺春閣に座す。……亦花畦十數有り、牡丹、荼蘼、佛桑、薔薇、紫荊を蒔き、佳き卉種々正に開きて、甚だ艷媚なり。好き花枝かな！……少頃月黒く、風忽ち大なりて、浙々として雨は下る。斜雨急に窓紙を打つこと、砂を爬ふ蟹の如し。……阿珠出でて、欄に倚りて看る、花落ちずや？ 花竟に落つ！ 地に滿つ臘脂の片、泥土に伴たり。花は薄命、花は薄命！ 零れ落ちて此に至れり。無情の雲雀地に就きて花片を啄ばみ蹂躪す、眼を側だてて視るに、啁々として鳴き已まず。……日は漸々として東より上り、微光落花を照らせば、狼藉なること血の如し。……阿珠前に見し枝は已に空し——花落つるも枝に返る。花落つるも枝に返る？……月は常に圓かならず、花に長命なし。缺陷何ぞ多きや、缺陷何ぞ多きや！ 天下何の處か黃

金世界は有る？

萍雲氏曰く、五濁[<sup>五</sup>]の惡世、何の處か人間の世なる？ 花落つるも枝に返るの世界、吾惟だ夢中に於いて或いは是を見るを得ん、然れども吾は恐るこの夢福の無きことを。……吾此を以て深く我が女界を悲しむ、吾は見る許多の同胞甚だ苦しむ有るを。「錦衾寂寞を延き、紅淚觀娛を謝す。」女界何ぞ缺陷多きや、此れ其の一なり。<sup>⑤</sup>

これは「許多の同胞」というように一般化して當時の中國の大部分の女性たちの典型的な情況を描いたものだ。しかし彼の個人的な體驗に即せば、主人公は名前こそ「阿珠」となっているものの、自らの境遇を歎き悲しむことしかできないこの少女は、當然、酈永平でなければならぬ。「豪俠」を尊ぶべき新しい女性の出現を呼びかける際には「花の字を以て女子の代名詞とすべからず」と謳っていたのに、「好花枝」では、そう謳った彼自身が「花落ちても枝に返る」ことは夢でしか見ることはできないと言う。

或る女性の影（森）

自らの境遇を嘆き哀しむしかない永平は「文弱」な一輪の花にすぎなかった。ここで、周作人が『女子世界』で「無名の女傑」の出現をあんなにまで熱烈に鼓吹したことを考えてみよう。彼が贊美する「無名の女傑」は、想いを寄せた酈永平を初めとする「文弱な花」とは、對の構造をなす。「無名の女傑」はつまり「無名の文弱」の對極であつたのだ。「文弱」な女性を主人公に据えたこの一編はそのまま「文弱」な永平に寄せる感傷ととていいが、その反面としての「女傑」の像には、彼の體驗からくる苦しく切ない希求を、私たちは讀み取らなければならない。そしてそこにはまた、一見時代の主潮に沿って書かれただけのような文章における彼の、辛うじての獨自性が讀み取れる。

「俠女奴」「女獵人」に續いて彼は『女子世界』第四・十五期にもう一編翻譯小説を發表した。「荒磯」である。この一編はコナン・ドイルの「The Man From Archangel」を、先に日本に留學していた魯迅から送られた山縣五十雄『英文學研究』<sup>⑥</sup>を基に翻譯したものである。この一編だけは、彼が『女子世界』に載せた他の文章とは



少し毛色が違う。彼はその譯記で次のように記す。

先生の著作、素趣味有るを以つて聞こゆ。彼小説を作るに、理想派の高遠落莫たるを喜ばず、亦寫實派の平凡無味の如くにはあらず。故に凡て作るところ、皆奇趣喜ぶべし。然れども我此れを譯せば、悲惨甚だしきを覺ゆ、未だ知らず閱者以つて如何と爲すかを。<sup>⑧</sup>

「俠女奴」や「女獵人」に流れる「文弱から豪俠へ」という啓蒙思想は表面的には存在しない——單なる娛樂小説のように見える。

この物語は、嵐に頻繁に襲われるスコットランド・マンジー灣の海岸沿いで、叔父の遺産によつて莫大な金を手に入れ、隱遁生活を決め込む虚無的な男ジョンと、或る嵐の晩ロシア・アルハンゲリスクからの船が難破に遭いジョンに助けられた少女、同船していたウルガネフという男の關係、いや、少女をめぐつて、戀に燃える男と、戀に對してはおろか人生に對して冷めた視線を持つ男の對峙の物語で

あるといつていいだろう。ジョンは、救助を求める難破船上の人々を見ても「今しも難破したる人々は、既に死の恐怖を半は感じたる者、今若し之を救ふとも、彼等は短き數年の間に、又もや同様の苦痛を受くるべし。故に今死に就くこそ却て彼等の幸福なれ、死を待つ<sup>の</sup>の苦痛は死よりも大なればなり」、「心に思へらく、何等の卑怯極まる蛆虫奴等ぞ、大人豪傑皆一度は此道を辿りたるに、何とて之を避けんとはするぞ」と一旦は見えて見ぬふりをしようとする。

だが、救助を求め叫ぶ人々のうちでただ一人、「怒れる浪の此方に余の立てるを見ても、自尊の念の爲めかはた其他に理由<sup>わけ</sup>のありてか、余に救助を乞はんとせず、唯毅然として物をもいはず、眞黒の海を眼下に視て、運命を天に任かして突立て」る壯夫を見とめる。その姿と、彼が同船上の少女を抱き寄せ、溺れたあとの指示か、何事か囁くのを見たジョンは心を動かされ、いよいよ舟が波に吞まれようとした時、「ま、よ哲學は又閑<sup>ひま</sup>ある時の事とせん、今は小舟こそ必要なれ」と果敢にも小舟を出して、波間に漂う少女を助けるのだった。助けはしたものの、美しい彼女は厭世

的（かつ禁欲的？）な生活を送っていた自分の氣持ちを亂し始めるのではないか、とジョンは微かに憂いはじめた。

その矢先、別の漁師に救われた壯夫——ウルガネフが二人の前に現れる。少女はウルガネフを見た途端怯え、ジョンの後ろに隠れて無言のうちにも彼に救いを求める。ジョンは厭がる少女を無理矢理にでも自分のものとしようとするウルガネフに對して「汝は千中に一を選びて、汝を喜ばざる女子に切なる心を寄するの愚をなすや」と獨り嘲笑うのだった。或る日、海岸沿いを散歩していたジョンはウルガネフに出くわす。いつものように少女を返してくれとジョンに懇願するウルガネフは、ジョンに自分が少女に執着する理由を語り始める。曰く、「私は性質靜として居ることが出来ぬたちで、……アーチヤンジェル港より濠州（オーストラリア）迄行かぬ港はありませぬ。私は御覽の如く粗暴で放埒（ほうりゃう）であります、故郷に一人粹（いさ）で都雅（みやび）かで口先（くちさき）が巧（じやうず）で女の機嫌（きげん）を取ることに長（た）けて居る若者（わかもの）があります。私は私の全心（しんしん）を注いで、生涯（しやうがい）の伴（とも）は此者（このもの）と極めて居る少女（むすめ）がりましたが、其少女（むすめ）も私の誠心（まことこころ）を多少報（むく）うて居りました。ところが、私

或る女性の影（森）

の不在（るす）の間に彼の若者は私の戀人を全然欺（うそ）し了（しま）せて、私のことを忘れさしてしまひました。私は象牙（ぞうぎやう）を仕（し）入れる爲めにハムマーフエスト港へ航海して、それから歸國（きこく）して見ますと、思ひ掛（おもひか）けなく私の戀人は彼の都雅（みやび）かな若者（わかもの）と結婚することゝなつて、現に其式（しき）を擧（あ）げる爲めに今しも教會（てう）へ出かけたと聞き込みました。かやうな折には、人の心は亂れるもので、私も殆ど夢中（むちゆう）でありました。私は自分の配下（てくだ）の水夫（みづう）で、いづれも數年來（かずねん）私と共に、生死（せいじ）の境に出入し、私に生命（いのち）を許した者共（ものども）を率（ひら）ゐて、突然其教會に亂入（らんにゅう）しました。折しも彼の少女（むすめ）と若者（わかもの）とは和尚（わしやう）の前に立ちて、將に結婚式（けっこんしき）を行はうとするところでありましたが、私は其中に割（わ）つて入り、やにはに少女（むすめ）を引捕（ひきとら）へました。其間に私の配下（てくだ）の者共（ものども）は驚（おどろ）き狼狽（ろうた）へる花婿（はなむこ）と介添人（かいそにん）等を擲（なぐ）り倒（たふ）して、それから私共（わたくしども）は少女（むすめ）を引きさらつて船（ふね）に立歸（たふ）り、直ぐ碇（いかり）を上げて白海（ホイトシイ）へと乗り出しました。私は少女（むすめ）を私の船室（せんしつ）に入れて出来る限り安樂（あんらく）にしてやり、私は水夫（みづう）共（ども）とフオークツスルに眠（ね）りました。私は時（とき）さへ經（た）てば、少女（むすめ）が私（わたし）を嫌（きら）ふ情（なさけ）も和（やわ）ら、遂（つい）には英國（えいこく）又は佛國（ふつこく）で私（わたし）に結婚（けっこん）することを承知（しやうち）す

るだらうと、そればかりを樂みにして、それから日を重ねて航海しました。……」しかし、少女は彼に心を許すことはなかった。そして、途中マンジー灣で嵐にあい難破したのだ。ジョンはその話を聞いても、別段動じることもなく、やはり少女を匿っていた。ウルガネフはそれ以來、姿を見せることはなかったが、ジョンの家を望むことの出来る砂山にはウルガネフが吸った巻き煙草の殻が落ちてゐることから、彼がまだ諦めずに、様子を窺つてゐることを知ることができた。或る日、ジョンは鬱々とした氣持ちを晴らそうと散歩に出る。海は恰も鏡のようで小波すら立つていなかったが、空には「啾々たる一種不可思議の唸聲うなりごゑ」に充ちて、ジョンは今夜はきつと嵐が來ると察し、家路を急いだ。途中、叫び聲を聞いた彼は、砂山から家を見ると、ウルガネフが、厭がり腕く少女を負つて、停めてある小舟に乗り込もうとするとところだった。ジョンはピストルを手にし、後を追うが、間に合わなかった。ウルガネフは小さくなった船のうえから、ジョンに恭しく別れを告げ去つていった。果たしてその夜、マンジー灣を暴風雨が襲う。――

翌朝、ジョンは海草に塗れて波間に漂うウルガネフを發見する。濱邊に引き上げてみると、その傷だらけの死體の下にはあの少女の亡骸もあった。ウルガネフは嵐の中少女を護り、少女は初めて彼のまごころを知り心を動かされたのだらう、ジョンにはそう思われた。なぜなら少女は「其可愛き頭をさも懐かしげに男の廣き胸に押當て、女の黃金色の長き頭髮が男の髻ひげと纏もつれ」合あひ、「喜びの見にて、莞爾として微笑を」含んでいたから。ジョンは二人の亡骸を荒磯に埋葬するのだつた……<sup>⑩</sup>。

この小説は物語として破綻をきたしている部分もあるが、その描寫は主要な登場人物三人の關係、特にウルガネフの少女への執着とジョンの冷靜さが鮮明である。ウルガネフは、想いを寄せる少女を、故郷を離れていた間に奪われた少女は厭がつていたが、ウルガネフの方は自分の想いを貫いて、結局は死というかたちではあったがそれを遂げる。その、好きになつたら死をも恐れぬ強靱で徹底した意思の強さと、後先顧みず行動を起す一途さ、そうしたウルガネ

フの形象は、當時の周作人の現實の姿とは正反對であるといえる。一方、この物語の語り手でもある虚無主義者の主人公ジョンは、戀に一途になって暴走するウルガネフを、傍觀者として冷靜に見つめ、その執着に呆れもする。周作人はそのウルガネフの態度を評して「戀は惡魔なり」と原文にも和譯にもない言葉をジョンに吐かせる<sup>②</sup>。虚無派のジョンと情熱的なウルガネフは、實は、分裂した周作人の自己像である。譯記でわざわざ「悲惨さを覺ゆ」と記すのは、自らがこの時期に嘗めた失戀の痛手を、ウルガネフが少女を失った過程や境遇とに重ね合わせ、またジョンの虚無的思考とある種の自棄にも、一層の近しさを覺えたからではないか。そう考えれば、後に周作人がこの作品に言及することはないが、彼にとってはかなり重要な意味合いを持つ作品となる。この物語を選んだのは、單なる娛樂性に惹かれたのではない。意識していたかどうか分らないが、周作人はこの作品に自己の投影を見たに違いない。英語を學ぶための參考書であった『英文學研究』に、偶々見出した異國の他人の作品ではあるが、それを借りて、當時の自分を

或る女性の影（森）

代辯しているのだ。この一編が『女子世界』での一連の作品と、一見すると一風變わっているのは、周作人が登場人物に自己を重ね合わせ、自己表現として翻譯したからである。<sup>③</sup>「好花枝」が、理想像としての「女傑」の裏返しで、鄺永平を初めとする當時の中國人女性の「文弱さ」を強調し、その逆説として女傑の必要性を説くものなら、この「荒磯」は、行動を起せなかった周作人自身の、いうなれば一種の理想としてのとるべき態度をウルガネフに假託した、逆説的な一編なのである。ウルガネフは戀に對する「無名の英雄」というべきか。少なくとも、周作人はそう感じたに違いない。テーマは違えど、鄺永平に代表される中國の女性のあるべき姿を託した「女傑」と同じ構造である。

「婚制の不良」は何も婦女だけにあてはまるものではない。傳統的な家の司る不良の婚制に無意識にか縛られて、周作人にしても永平との愛を勝ち取ることができなかったが、その哀しい戀を経験しながら同時進行的に、彼は『女子世界』に一連の女性啓蒙論を發表する。それは南京時代の傷心を癒す行爲から始まり、彼の進むべき道の一つ

を決定した。勿論、彼の女性論全てにこの戀愛體驗——酈永平の影があるというのではないけれども。少なくとも、周作人は酈永平によって、女性論へと導かれた。

おわりに

戀は誰しもするだろう。しかし、誰もが周作人のように女性論を書くわけではない。

周作人は一九三四年に書いた「周作人自述」の中でこう言う。「今、ひとこと付け加えるとするなら、フロイト派の児童心理が理解できなければ、彼（周作人）の思想態度を批評するにどんな説をだそうが、全くの無駄であり、全くの徒勞である」と。<sup>64</sup>これは周作人自身のただの自己分析、自己解釋に過ぎず、ヨーロッパのブルジョワ社會に培われたフロイトの児童心理の説を、周作人が過ごした中國の封建社會での幼年期に當てはめて、正確に適用できるのかどうかは分からない。だが、ここで一旦素直に彼の解釋に従ってみるなら、エロス、いやむしろエロスの躰きこそが彼の一生を決定したということだろう。フロイトの説は修正

されながら今も心理學の基礎をなす。周作人の性格形成の過程と後々の文章に表れる特徴を考えれば、三〇年代の彼の自己分析はそれほど的外れではない。彼は、十八歳の時果たせなかったエロスをこれから後、熱情を帯びながらも冷靜に「文章の上で」放射していく。それは當時の中國を黴臭く支配していた「禁欲、でなければ縱欲」という儒教的雰圍氣を帯びるところかまったく曇りなく、中庸ニユウなものの（周作人にとっては）だった。——それは酈永平を車耕南から奪い、エロスを成就する側に自分が立っていれば書けないものだった。

彼が『女子世界』に発表した文章は幼稚で、全くの習作に過ぎない。後の文章にもその影響は直接的には見られないから、今まではそれ程顧みられなかった。だが、なぜ女性論を一生涯かけて書いていくことになったのか、その隠れた契機はここに密かに眠っていたのである。

引用参考文献書目

\*引用した周作人の著作は主に鍾叔河編『周作人文類編』全十

卷（湖南文藝出版社 一九九八年九月）及び止庵校訂『周作人自編文集』（河北教育出版社・二〇〇二年）、『談虎集』上下巻は（北新書局・「上・一九三六年六月」「下・一九三五年十一月」）、『雨天的書』は（北新書局・一九三三年三月）、『過去的生命』は（岳麓書社・一九八七年七月）、『知堂回想錄』は、（三育圖書文具公司・一九七四年四月）による。引用部分は、各注に示してある。

\* 周作人日記 魯迅博物館藏『周作人日記（影印本）』（大象出版社・一九九八年六月）及び魯迅博物館『魯迅研究動態』、人民文學出版社『新文學史料』に掲載の標點版を使用した。日記の日付はすべてそのまま、舊暦による。

「日記第八 秋田夢屏」という記述は『新文學史料』版による。大象版では省略されている。おそらく、日記の表紙に書かれたものと思われる。

\* 『清議報』 沈雲龍輯『近代中國史料叢刊第三編』第十五輯百四十一―百五十一（臺北・文海出版社影印本・一九八七年―二〇〇〇年）

\* 『新民叢報』 梁啓超主編

\* 周作人が『女子世界』に發表した翻譯小説のうち、今、日本で讀めるものは「俠女奴」一編のみである。これは施蛰存主編『中國近代文學大系』第11集・第28卷・翻譯文學集3（上海書店・一九九一年四月・三五九―三八二頁）に收録されている。

或る女性の影（森）

## 註

① 周作人が『女子世界』に投稿した文章の一覽を次に挙げる。（次頁上欄）これは、上海圖書館編『中國近代期刊篇目彙錄』第二卷（中）（上海人民出版社）の『女子世界』の目録を參考にした。『女子世界』は一九〇四年一月から一九〇七年七月（第十八期）まで發行された。

『女子世界』は今北京圖書館と吉林大學に所藏されている。日本で讀めるものは、周作人の一部の著作を除き『辛亥革命前十年間時論選集』第一巻下巻（三聯書店・一九七八年四月）に、竹莊「論中國女學不興之害」、丁初我「女子家庭革命說」、亞特「論鑄造國民母」、亞盧（柳亞子）「哀女界」が收められており、第二巻上巻にも丁初我「婦女社會之對付華工禁約」が收録されているのがほぼすべてである。

引用文中、周作人が『女子世界』に發表した文章の譯はあえて訓讀のままにした。そのほうが、彼がこの時期魅了された、いわゆる「新民體」の文章の特色が生かされると思ったからである。

\* 『篇目彙錄』では、第十期から第十二期と第十六、十七期（合刊）は「原刊不署出版時間」とされ、第十三期から第十五期はただ「一九〇五年」とされているだけである。ただ、「題俠女奴原本」の掲載された第十二期（「俠女奴」の最終話も掲載された）に關していえば、この時期の周作人の文章が收録されている鍾叔河編『周作人文類編』（湖南文藝出版

『女子世界』號數	題名・掲載欄	署名
第五期(一九〇四年五月)……	偶作 [文苑 因花集] 說死生 [女學文叢] 論不宜以花字爲女子之代名詞 [女學文叢]	・會稽女士吳萍雲 ・會稽十八歲女子吳萍雲 ・吳萍雲
第八～九、十一、十二期 (一九〇四年八～一九〇五年)	……俠女奴 [小説]	・萍雲女士
第十二期(一九〇五年)・	……題俠女奴原本 [文苑 因花集]	・會稽碧羅女士
第十三期 (一九〇五年)……	短篇小説 好花枝 [小説] 短篇小説 女獵人 [附録]	・萍雲 ・會稽萍雲女士
第十四～十五期 (一九〇五年)……	荒磯 [小説]	・會稽萍雲
第十六、十七期	……女禍傳 [小説] 短篇小説『造人術』評言	・病雲 ・萍雲

社 一九九八年九月)によれば、一九〇四年の出版とされている。(『周作人文類編』⑧ 希臘之餘光「五三二頁」)だが、周作人の日記によれば、彼が「俠女奴」の翻譯を脱稿したのは一九〇五年二月十四日、そして二日後の十六日に編集者である丁初我に送っていることから、十二期からは一九〇五年の出版になる。

② 周作人『知堂回想錄』「三五、學堂大概情形」(三育圖書文具公司 一九七四年四月 九十二頁)

③ 周作人『知堂回想錄』「四一、老師(一)」(二〇五頁)

④ 『女子世界』への投稿のほかに、丁初我の紹介で一九〇五年に翔鸞社より出版された『玉虫緣』がある。これは、エドガー・アラン・ポーの「The gold-bag」を山縣五十雄編譯『英文學研究』の原文に基づき翻譯したものである。『英文學研究』については注⑨を参照のこと。

⑤ 以上、周作人『知堂回想錄』「三〇、青蓮閣」(七十九頁)

⑥ 周作人の初期の女性に對する思想や文章に影響を與えたと思われる具體的な讀み物としては、『世界十女傑』や『新小説』に連載された「東歐女豪傑」の名を擧げることができる。例えば一九〇三年四月二日の日記によると、『經國美談』を少しばかり讀む。書物としてはいいのだけれど、政治のことが論じてあり、我が國の小説とは結局違つて佳境に引き込まれない。『新小説』の「東歐女豪傑」や「海底旅行」の佳さには及ばない」と記されている。『世界十女傑』については

梁啓超によるものかと思われるが、作者、所在、内容ともに未詳。「東歐女豪傑」は彼がこの時期愛讀したもので、羅普によるロシア虚無黨の女性テロリストを描いたものである。

「東歐女豪傑」については、夏曉虹著・清水賢一郎・星野幸代譯「纏足をほどいた女たち」第一部「行動の新時代」3女性新聞の誕生／女性紙の男性執筆陣」六十九頁（朝日新聞社・一九九八年六月）による。

⑦ 周作人の當時の梁啓超への傾倒ぶりは日記からも窺える。

例えば、一九〇二年七月三日「夜同學の黃明第君のところへいって『新民叢報』第十一號「六月朔發行」を借りる。讀んでいると、素晴らしい書が多く、それはほとんどが飲冰子の著したものである。深夜まで讀んで、寝るのが惜しかった。善哉！善哉！私を魅了してやまぬ。」また彼は飲冰室に做って飲冰室と號しその日記を「飲冰室日記」と銘打っていた時期もある。

⑧ 以上、丁文江・趙豐田編、島田虔次編譯『梁啓超年譜長編』第一卷（岩波書店・二〇〇四年一月・二九一―二九二頁）

⑨ 梁啓超、小野和子譯注『清代學術概論——中國のルネッサンス』二二五 梁啓超の革新鼓吹」（東洋文庫二四五・平凡社・一九七四年一月・二七二頁）

⑩ この周作人の回想は『知堂回想錄』二三〇、青蓮閣より。

『新廣東』については張靜廬輯注『中國近代出版史料初編』或る女性の影（森）

篇』（一九五三年十月）を参考にした。そこでは、出版年については不明とあるが、張枏・王忍之編『辛亥革命前十年間時論選集』第一卷・上冊（三聯書店・一九六二年）では、一九〇二年の部分に收録されている。「革命軍」については魯迅博物館・魯迅研究室編『魯迅年譜』第一卷（人民文學出版社・一九八一年九月・一〇一頁）を参考にした。ちなみに日記によると、周作人は『新廣東』を一九〇三年三月頃入手したようである。

⑪ 「革命を推進した革命派の側でも、女權もしくは男女平等を、それ自體として問題にしたことは、ほとんどなかった。中國同盟會の機關誌『民報』には、女權を論じた文章は一篇もなく、女權の文字がでるのは三個所、そのうち、中國における女權確立という文脈のなかで論じられているのは、わずかに一個所、漢血・愁豫の戯曲「崖山哀」（『民報』二號）の導言のみである。……だが、このことは、革命派が女權を否定していたということではなくて、むしろ實現さるべき三民主義の民權のなかに、未分化のまま女權をも包攝していたのだ、とかがえてよいだろう。」（小野和子「辛亥革命時期の婦人運動——女子軍と婦人參政權——」、小野川秀美・島田虔次編『辛亥革命の研究』筑摩書房・昭和五十三年一月・二八四頁）

⑫ 梁啓超『飲冰室專集』三「自由書」「無名之英雄」（臺灣中華書局・一九七二年三月・四十八―五十二頁）



- ⑬ 松尾洋二「梁啓超と史傳——東アジアにおける近代精神史の奔流——」（狭間直樹編『共同研究 梁啓超』みすず書房・一九九九年・二五九—二六〇頁）
- ⑭ 小野和子「京都大學最初の中國人留學生——「女性の權利」の譯者馬君武——」（京都橘女子大學女性歴史文化研究所『京都の女性史』思文閣・二〇〇二年・一二—二頁）
- ⑮ 一九〇六年十二月八日發行。
- ⑯ シャルロット・コルデー。蘆花生編『世界古今名婦鑑』（東京民友社發行・明治三十六年）に、「佛國由來奇女士に富む」としてローラン夫人らとともに名が擧げられ「シャルロット、コルデーはマリアとともに千古青史に血痕を刻む」と紹介されている。また、彼女のことはすでに一八九〇年に、大阪梅花女學校・京都同志社・神戸英和・岡山山陽英和の四女學校連合の「女文會」による會誌「つばみ」でも「佛國女傑 謝錄多、可爾的小傳」として紹介されている。（平田由美『女性表現の明治史 樋口一葉以前』岩波書店・二〇〇一年十一月・一四五頁）
- ⑰ この時期の女學雜誌で喧傳された女傑にはつぎのようなものがある。『女報』第三期の批茶「<sup>ヤリ</sup>」女士、張竹君、第八・九期に羅蘭夫人。『女學報』一九〇三年第三期に俾士麥克（<sup>ビスマルク</sup>）夫人、第四期に英國女傑涅幾柯兒（<sup>ナイチンゲール</sup>）傳、世界十女傑演義。『中國女報』一九〇七年第一・二號に女英雄獨立傳（小說）。同年『中國新女界』第一期に創設萬國紅十字看護婦隊者奈挺格爾（<sup>ナイチンゲール</sup>）夫人傳、美國大新聞家阿素里女士傳、第二期に美國大教育家梨痕女士傳、第三期に法國救亡女傑若安（<sup>ジャンヌ</sup>）傳、第四期に大演說家黎佛瑪女士傳、英國小說家愛里阿脫女士傳、第五期に博愛主義實行家墨德女士傳、羅琰女士傳、第六期に俄國女外交家那俾可甫（<sup>フツィ</sup>）夫人傳、法國新聞界之女王亞丹（<sup>アダン</sup>）夫人傳。『天義報』一九〇七年第二卷に法國女傑露依斯（<sup>ルイス</sup>）傳、俄國女傑罵閣臣語。第四卷に露國革命之祖母婆利簫斯楷傳、第五卷に秋瑾傳、第八・九・十合卷に俄國女傑遺事準譯。一九〇七年『神州女報』は鑑湖女俠秋瑾の追悼號のようなもの。
- この時期に「女傑」と同様の意味で使われたものにはほかに、「英雌」「女豪」「女俠」「女豪傑」などがある。『新民叢報』に發表された文章のタイトルにもなった「女豪傑」ということばに關しては、武林印刷所から發行された著者不明・刊行年不明の『女豪傑』というものがある。これは梁啓超（近世第一女傑）羅蘭夫人傳のリプリントであるという。（夏曉虹『晚清的魅力』『近代小説知多少』百花文藝出版社・二〇〇一年四月・十八頁）日本でも一九〇一年に、青木嵩山堂から出版された、松居眞玄『女豪傑』というものがある。
- ⑱ この部分の『女子世界』に關する記述は主に丁守和主編『辛亥革命時期期刊介紹』第一集（人民出版社・一九八二年・四六一—四七三）と夏曉虹『晚清女性與近代中國』（北

京大學出版社・二〇〇四年八月)による。『申報』と金天翮

については金天翮著・陳雁編校『女界鐘』(復旦大學歴史學系 復旦大學中外現代化進程研究中心・近代中國研究專刊 四・上海古籍出版社)を参考にした。一九〇三から翌年にかけては中國において、女學雜誌の創刊が相次いだ年である。

この二つのほかにも、上海で『女學報』が、廣州で『女子學報』が創刊され、書籍では林樂知『全地五大洲女俗通考』、上海「蘇報館」からは『世界十女傑』が発行されている。

(『女界鐘』より)夏曉虹氏の『晚清女性與近代中國』は『女子世界』に關するまとまった研究であり、この分野の研究では欠かせない著作である。

①⑨ 鍾叔河編『周作人文類編』⑤ 上下身——性學・兒童・婦女(湖南文藝出版社・一九九八年九月・二七一頁)

②⑩ 「美世兒」は「フランス」無政府黨の女將として社會主義の極端に進める」(『世界古今名婦鑑』十三 夜叉面の女菩薩) ルイ・ミシエル、「瑪尼他」は、伊太利亞建國三傑の一人ガリバルディーの妻、アニタ・リヴェロのこと。『新民叢報』第十期「意大利建國三傑傳(續第九號)」に「絶世の女豪傑瑪尼他夫人」として登場する。また、德富蘆花編『世界古今名婦鑑』七「英雄の妻(ガリバルディー夫人)」において、「アニタ・リヴェロ」は「夫に慙ぢざる稀世の烈婦なりき。」として紹介されている。單純なミスであるが、梁啓超が日本語表記の「ア」を「マ」と勘違いし、それがそのまま

或る女性の影(森)

廣がったと思われる。

②⑪ 梁啓超は『新民叢報』において様々の傳記を紹介しているが、そのほとんどが民友社のものを翻譯している。この「羅蘭夫人傳」も德富蘆花編『世界古今名婦鑑』第一章「佛國革命の花」の全譯である。(松尾洋二「梁啓超と史傳——東アジアにおける近代精神史の奔流——」)

②② 『新民叢報』第十號(光緒二十八年「一九〇二年五月十五日」、憂患餘生「捫蝨談虎錄」のなかの一編。憂患餘生は、連夢青か。

②③ 小説林社は『女子世界』の編集者である丁初我が興した出版社。

②④ 鍾叔河編『周作人文類編』⑧ 希臘之餘光——希臘・西洋・翻譯(五二三頁)

②⑤ 原著はイギリス、星德夫人の『南非搏獅記』というが、著者、本の詳細ともに不明。

②⑥ 『周作人文類編』⑧ 希臘之餘光——希臘・西洋・翻譯(五四四頁)

②⑦ 周作人「知堂回想錄」[四一、老師(一)]

②⑧ 松尾洋二「梁啓超と史傳——東アジアにおける近代精神史の奔流——」(二八八—二八九頁)

②⑨ 夏曉虹『晚清文人婦女觀』[上編：總論 晚清婦女思想中的新因素 1 男女平等與女權意識](葉曼女性文化書系・作家出版社・一九九五年八月・七十三頁)

③① 「女權」ということが晩清において明確に意識されたのは一九〇四年である。初めは、「女權の獲得」ということについてみな樂觀的な態度をとっていた。しかし丁初我をはじめとして、「女權の獲得」よりも「女學の振興」に重きをおくようになった。そして、「女權の獲得」を容易なものとするのは、當時十八歳で情熱に驅られていた柳亞子だけであつたという。(夏曉虹『晚清女性與近代中國』「上編 女性世界」第三章 晚清女報の性別觀照) 『女子世界』研究 第四節「女權」優先還是「女學」優先 (北京大學出版社・二〇〇四年八月・八十三―九十二頁)

③② 夏曉虹『晚清文人婦女觀』「上編：總論 晚清婦女思想中的新因素 1. 男女平等與女權意識」(七十六頁)

③③ 『談虎集』下卷(北新・四二七頁、河北・二七三頁)『周作人文類編』⑤ 上下身——性學・兒童・婦女(二〇一頁)もとは一九二七年十二月一日刊の『薔薇』一周年増刊號に掲載され、のち『談虎集』に收録された。

③④ 『天義報』は一九〇七年六月に、何震や劉師培らのアナークリストによつて日本で發刊された、「女界の革命」を標榜する雜誌である。周作人は、『天義報』第四卷(一九〇七年七月二十五日刊)の投稿欄に、「獨應」の署名で「婦女選舉問題」と「絶詩三首」を、また第七卷に「讀書雜誌」の文章を發表している。第五卷には周作人(獨應)に對して、住所が分からないので佳作と翻譯があれば送ってほしいと呼びかけ

る廣告が出てゐる。このことから、周作人と、『天義報』の編集者たちとの間には人的な關係はなかつたことが窺える。

また、周作人の發表した「婦女選舉問題」はイギリスの女性雜誌から女性參政權についての文章を選び翻譯したものであるが、その最後に『天義報』の記者によつて、「婦人の參政は、昨今の一大問題であるが、參政權を獲得することは國家があり政府があるというのが前提である。我が雜誌の意圖は、人治を絶滅させ、男子の特權を消滅し男女を平等にすることにあり、婦人參政權のみを目的とはしない」と記されており、周作人は女性の參政權について紹介しているものの、編集の意圖とはそぐわなかつたことが分かる。また、『讀書雜誌』は主に西洋の女性作家を紹介したものである。『女子世界』から『天義報』へ、彼は表現の場を移すが、取り扱う内容が異なるだけで、翻譯し紹介するというスタンスは『女子世界』と同じである。

③⑤ 「裘毓芳は『白話學會』の創設者である裘廷梁のまいたこである。二人は共同で編集を行い、晩清の白話運動において理論と實踐の兩面で有名であつた。」夏曉虹『晚清文人婦女觀』「上編：總論 晚清婦女生活中的新因素 3. 女報」(二十九頁)

③⑥ 夏曉虹『晚清文人婦女觀』「上編：總論 晚清婦女生活中的新因素 3. 女報」(三十五頁)

英米では一八九五年に「女の權利の獲得」という意味で

「フェミニズム」という言葉が使われ始め、一九一〇年代には一般にも廣まったという。参政權の要求を主軸に据えた女性運動は「第一波フェミニズム」と呼ばれ、英米では一八六〇から八十年代に始まり、一九二〇年代に終息したと見なされている。（『フェミニズム』竹村和子・岩波書店二〇〇三年五月 参照）こういった流れが、日本を經由して中國に渡ったのか。まだ女性のリテラシーや女性の權利の獲得ということに對して、女性自身が考えをめぐらすことのできなかった中國では、そのような思想を享受することのできる男性がまず女性の啓蒙のために女學雜誌を創刊する、という形になったのだろう。世界的に見ると、同時的な現象に思われるが、社會的、文化的な背景を考えると、そこには質、レベルともに大きな違いがあるだろう。

③⑥ ③⑤の注に同じ。三十六頁。

③⑦ ③⑤の注に同じ。三十九頁。

③⑧ 平田由美『女性表現の明治史——樋口一葉以前——』「第四章 女の文體を計る——書簡文的規範と逸脱する本文」(一四四—一四五頁)

③⑨ 以上夏曉虹『清末文人婦女觀』「上編：總論 晚清婦女生活中新的要素 3. 女報」(三十五—三十六、四十一頁)。この引用は包天笑『鈞影樓回憶錄』『編輯雜誌之始』(大華出版社・一九七一年六月)及び、秋瑾の創刊した『中國女報』一期「創辦『中國女報』之草章及意旨」・「敬告姊妹們」による。

或る女性の影(森)

この秋瑾の文章は『秋瑾集』(中華書局・一九六二年十二月・十二—十六頁)、郭長海・郭君兮輯注『秋瑾全集箋注』(吉林文史出版社・二〇〇三年十一月・三七七—三八一頁)に收められている。

④⑩ 周作人『知堂回想錄』「五三、我的筆名」(一四二—一四三頁)。

④① 夏曉虹『晚清文人婦女觀』「上編：總論 晚清婦女思想中的新因素 1. 男女平等與女權意識」(七十三頁)

④② 『雨天的書』(北新書局・五十七頁、河北教育出版社・四十五頁)『周作人文類編』⑩ 八十心情——自敘・懷人・記事』(二十九—三十一頁)

もとは一九二三年三月二十八日刊『晨報副鐫』に掲載された。のち『雨天的書』に收録された。

周作人は木下空太郎からこの『食後の唄』を贈られている。一九二〇年十月十二日、北京を訪れた空太郎は「午前中周作人尋ね來ル 胡適ノ詩集ニ嘗試詩集アリ食後の歌ヲ與フ」(『木下空太郎日記』第二卷・岩波書店・一九八〇年一月・一九四頁) 周作人はその詩集を手にし、「ひとしきり捲つて、おもしろいと思う詩が幾首もあった。中國語に譯してみたいと一晚頭を捻らせてみたものの、結局一首も譯せなかった」(『談虎集』上卷「譯詩的困難」一九二〇年十月二十五日刊『晨報副鐫』に掲載、北・二十一頁、河・十八頁、文類編・六九八頁)と言っている。引用した『絳絹裏』は、周作人が

手にした、單行本『食後の唄』（大正八「一九一九」年十二月十日 アラギ發行所）に收められている。周作人の「娛園」原文では、この詩を中國語に翻譯している。論文中ではその部分は木下李太郎の「絳絹裏」の原文を引用した。引用文中、詩のルビは李太郎の詩原文による。

- ④③ 「她們」（周作人『過去的生命』岳麓書社・一九八七年七月・五十一―五十二頁）『過去的生命』は周作人唯一の新詩集。一九二九年上海北新書局より出版され、新詩三十五篇と序一篇が收められている。この岳麓書社の『過去的生命』は一九三〇年四月の再版本を底本としている。

- ④④ 周建人口述・周晔編寫『魯迅故家的敗落』「九、昇叔要求替斬」（湖南人民出版社・一九八四年七月・九十頁）

- ④⑤ 附錄（後附）の家系圖を參照のこと。

- ④⑥ 周建人口述・周晔編寫『魯迅故家的敗落』「二十一、要改變國民的精神」（二四一頁）

- ④⑦ 一九〇六年、魯迅は日本留學から歸つて朱安と結婚する。「光緒三十二年の、六月の初めだったか、長兄が日本から歸つてきた。多分母は事前に、彼が歸國したら結婚するようにとははっきり言つてなかったのだろう。母と兄が二人きりで長いこと話し合っているのを見ただけだった。……結婚してから、兄は新婦が字も讀めない上に纏足を解いていないことも知った。彼が以前に書いて寄越した手紙は全くのムダであったのだ。新婦の名前は朱安といい、玉田叔の祖母の内侄女

……兄の失望している様子を見て私は従姉妹たちのことを思い出した。しきたりでは同姓では結婚できないことになっており、同姓であれば、たとえ血縁が遠くても、同族でなくてもやはり結婚は出来ない。姓が違えば、たとえ母方の従姉妹であっても、血縁が近くても結婚でき、親戚同士の縁組という。母方の叔父には娘が四人あり、みんな漢文がよくでき、一番上の琴姑がとりわけ優秀で、とても高度な醫學の書物も讀めた。兄が南京に行っているとき、兩家が縁組しようかという話が持ち上がったことがあった。しかしその時それを聞き知った長媽媽が「差しさわりがありますえ」とぶつくさいうものだから、その話は立ち消えになった。兄は結局知らず終いだったけれど琴表姉はこの話を知っていた。當時彼女の方がどう思っていたかは聞かず（もちろん彼女は言いたがらなかっただろうが）、その後叔父は別の人のところへ嫁にやり、彼女はほどなくして病死してしまった。彼女は今わの際に、世話をしてくれていた氣心知れた媽媽にこういった。「私には心残りがあります。死ぬ前にいつておかなければなりません。それは以前周家との縁組の話が持ち上がったのに、後になつてはつたりその話が出なくなつたことです。このことは私の一生涯の心残り、死ぬまで忘れられないのです。」後にこの媽媽が、琴表姉の臨終の話を母にした。母はそれを聞くと、首をうなだれて長いこと押し黙つていた。……もしも母が叔父方から嫁を探さないなら、うちの酈家の姨父の娘

永平を嫁にしてもいいのである。しかし母は平姉をただ娘と  
思っていただけで息子の嫁にならなかったのである。平姉は  
車耕南に嫁ぎ、夫婦間は不和で、よく母のところに来ては彼  
女の不幸を訴えていたものである。」(周建人口述・周晔編寫  
『魯迅故家的敗落』二二一、要改變國民的精神二四一、  
二四二頁) また周氏兄弟の母瑞は、魯迅と朱安の「不幸な」  
結婚を取り決めたことを悔いて、一九〇九年に作人が日本人  
女性羽太信子と結婚することになったときには何もいわず、  
彼の自由にしたのだった。(張菊香・張鐵棠編著『周作人  
年譜 一八八五—一九六七』(天津人民出版社・二〇〇〇年  
四月・八十頁))

④⑧ 周建人口述・周晔編寫『魯迅故家的敗落』二二三、「袁世  
凱毒死了萬歲爺！」(二五七頁)

④⑨ 周建人口述・周晔編寫『魯迅故家的敗落』二二六、想起  
了高文錦」(三〇五頁)

⑤① 「歛冰室日記 秋津舊遊子」は一九〇二年「秋田夢平」の  
名が記される日記第九の名前(日にちは不明)。「歛」は  
「飲」の本字。「克郎」は一九〇二年八月六日、「私は克郎と  
號を改めることにする。名は抗、諧聲を取る。私は今まです  
でに十數回號を改めたが、改めてはすぐに使わなくなつて、  
一つとして使い續けているものはない。この號は永く使用す  
ること、容易く改めることはできない。」と記す。また、梁  
啓超はクロムウェルを「克林威尔」と譯したが、周作人が

「克林」とせずに「克郎」としたのは「林の字は凡庸である  
から」。

⑤② 『女子世界』第十六、十七期に「女禍傳」を發表した際の  
筆名は「病雲」。また、「平雲」は小説林社より一九〇五年に  
出版された『孤兒記』(ヴィクトル・ユゴー『死刑前の六時  
間』の翻案)の筆名。

⑤③ 周作人『知堂回想錄』六三、五年間的回顧」一六七頁。

⑤④ 周作人日記、一九〇三年四月十日。

⑤⑤ 包天笑『釧影樓回憶錄』「結婚」(大華出版社・一九七一年  
六月・一九七頁)

⑤⑥ 彼女がいつ亡くなったのかは不明。周作人の日記(一九一  
六年)には、十二月九日「車の家の平姉さんがやってくる、  
泊まっていく。」その四日後十三日に、周作人の母親が還暦  
を迎える。永平は十五日に「酈の家に歸る」と記されている。  
周作人の日記で永平の名がちゃんとした形で記されるのはこ  
このみ。それ以降、彼女に關する記載はない。

⑤⑦ 『女子世界』の編集にも携わった一人、曾樸も周作人のよ  
うな親戚との戀を體驗した一人である。彼の場合は丁氏二表  
姐(祖母丁氏の遠縁である女性)に思いを寄せた。時萌著  
『曾樸研究』(上海古籍出版社・一九八二年八月)「曾樸生平  
系年」によるとそれは十六歳の時だった。だが、結局「不幸  
にも宗法社會では彼の奔放な情熱のほとばしりは受け入れら  
れなかった。その結果彼は狂猛、浮薄として責められ、終生

消えることのない戀愛上の傷を背負った」。そして十八歳の時、「私は丁女士「丁のこと」との結婚問題が絶望的になると、病になり、精神は極めて衰退した。」「私はこれより歩む道がなくなつた。放蕩という方法で煩悶を自ら解き放つよりしかたがなくなつた。おおよそ私の肉欲をほしきままに出来る場所では……私はやらないことはひとつもなくなつた……もし父親が私を北京にやらなかつたとしたら、どんなことまでしでかしたかわからない（樽本照雄氏譯による。これは息子盧白による「曾孟樸先生年譜」に引用された孟樸の日記の一部分。『清末小説閑談「曾孟樸の戀愛」二八四頁」）曾樸が丁氏との結婚を果たせなかつたのは、宗法社會に阻まれただけでなく、彼自身の普段の性的素行にもよるが失戀してもその時点で宗法社會の缺點を見つめ直そうとはせず、ただ自分の熱情に浮かされて走つてしまふ。周作人はその點、もちろん個性の相違ということもあるが、自らの戀愛、そして自らを取り巻く社會を一步引いた立場から見つめなおし、日記のような慨嘆が生まれるのである。曾樸は一九二〇年代（二八年）になりこの戀愛に基づいた小説を發表する。『魯男子』第一部「戀」である。（樽本照雄「曾孟樸の戀愛」『曾孟樸の修學』を參考にした。『清末小説閑談』（大阪經濟大學研究叢書第XI冊・法律文化社・一九八三年九月）

- ⑤7 『周作人文類編⑨ 夜讀的境界—生活・寫作・語文』（一九八—七〇〇頁）

⑤8 當時、日本語は讀めなかつたが、漢字で分かる部分は日本語譯から借りているところがある。この「荒磯」というタイトルも山縣五十雄の譯からとっている。

⑤9 山縣五十雄譯註『英文學研究』は明治三十八年六月に内外出版協會より出版された英語の學習參考書。「The man from Archangel」のほかに W.M. Thackeray 「The story of Mary Ance」 英詩集 Edgar Allan Poe 「The goldbug」 Charles Dickens 「Horatio Sparkins」 Mark Twain 「The Killing of Julius Caesar "Localized"」 が收録されている。もとはそれぞれの編が分冊で發行され、それらが明治三十八年（一九〇五）六月に合訂された。『荒磯』はその第二冊で明治三十四（一九〇一）年十一月に出ている。周作人は一九〇四年十二月にこの書から「The goldbug」を「山羊圖（後に黃金虫と改題）」として翻譯していることから、魯迅から送ってもらつたのは分冊と考えられる。この本は「研究」と名が付いていて、作者に關する短いコメントがあるものの、全くの學習參考書である。だが、明治期にはこうした學習參考書によつて外國文學の實物にはじめて接した人も多かったのだろう。異文化との接觸の一つの形である。なお、山縣五十雄にはこの他に、明治三十七年言文社より出版された『英詩研究』上中下三冊がある。

- ⑥0 『周作人文類編⑧ 希臘之餘光—希臘・西洋・翻譯』（一二五頁）

⑥1 「」内の文章は、山縣五十雄の譯による。ルビは原文による。

⑥2 樽本照雄「漢譯ドイル『荒磯』物語——山縣五十雄、周作人、劉延陵らの譯業」(ホームページ「清末小説研究會」)

それによると、「周作人の漢譯は、譯者による加筆、あるいは省略がいくつかあるが、基本的に英文原作に忠實だということができる。」とのことである。

⑥3 周作人が分冊「荒磯」をいつ魯迅から送ってもらったのか、日記には記載がないので不明である。しかしこの一冊が一九〇一年の出版であることを考えると、魯迅が一九〇二年四月に日本に留學するので一九〇三年には周作人はこの本を手にしていた可能性がある。そう考えると、周作人が日記に記している虚無的なことと、主人公ジョンが冒頭でメモに記す虚無的なこととは関係があるのではないか。たとえば、論文中でも引いた「世界には過去、未來があり現在はない。現在の世界なのだから現在の我はない。現在の我、我に非ず。然れども我に非ずというからには、明らかに我は存在し、明らかにこの世に我の位置を占めている。故に我に非ずといながら、我のなかったためしはない。我が存在しないことはないのだから、即ち我は存在する。」「世界に我あるや、すでに二十年。然れども二十年前に我はなく、二十年の後にも必ずや我はない。則ち我の我爲るや、亦僅かに弱草に棲む輕塵の如く、指で弾けば終に寂滅に歸する。」という言葉は、ジ

或る女性の影(森)

ヨンの「此者<sup>⑥4</sup>」余が生まれし前より、前へくと旋轉し、今も猶ほ旋轉中にて、余が死後も亦旋轉前進するなるべく、唯これ廻轉する一個の不思議物、何人も其何處より來りしか、又は何處に行かんとするか知る者なし。此動きて止むことなき團塊の外皮に、無能無力、蛆虫の如き者幾億萬蠢動し、何の目的もなく、徒らに空間に拉扯<sup>ひきつづ</sup>れ行く。余ジョン、マクヴィッチー亦此等蛆虫の一なり。(以上山縣譯)と似た雰圍氣を持つが、周作人がこの本を手にした時期が不明なため、彼の日記における虚無的な記載が「荒磯」に影響を受けたものであるかは分らない。

⑥4 『周作人文類編』⑩ 八十心情——自敘・懷人・記事(一一二頁)

\* 「自述」は一九三〇年に書かれた。引用の部分はその「補注」であり、一九三四年十二月刊の北新版『周作人論』に收録された。「自述」自体は、自編文集にはとられていない。

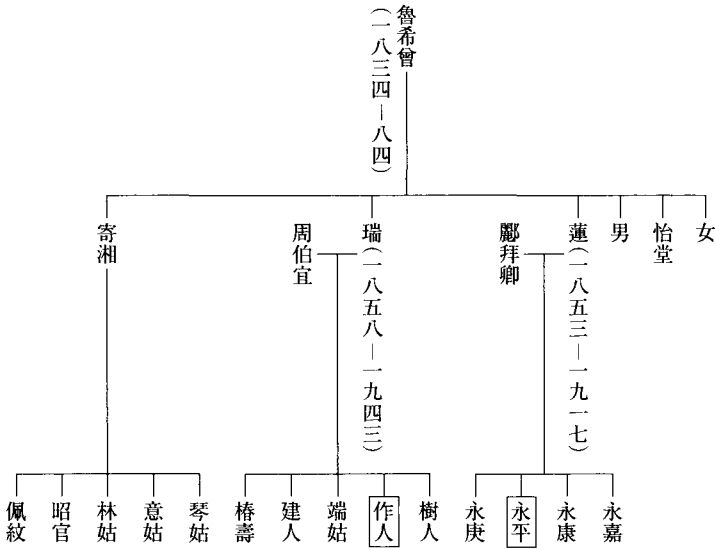
## 附記

本稿脱稿後、夏曉虹編『女子世界』文選(二〇〇三年八月・貴州教育出版社)を見ることができた。ここには『女子世界』掲載の文章が相當數收録され、雑誌『女子世界』の全體像がかなりの程度、明らかにになる。なお、本稿作成にあたって、小野和子先生よりご教示を戴いた。ここに記してお禮申し上げ



附錄

紹興魯氏家系圖 (右より左 出生順)



る。